

## 戦時期、陸軍恤兵部の慰問政策 ——恤兵部員の足跡を手掛かりにして——

押 田 信 子

本研究は日中戦争時における、軍部の慰問部署である陸軍恤兵部の慰問政策について、検討、考察することを目的としている。第1節は日清戦争時に開設され、1945（昭和20）年終戦を迎えて消滅した、戦時独特の組織「恤兵部」の概要と恤兵行為に沸く国民の動態に言及した。第2節～第4節は主に国内、戦地慰問の企画立案から慰問団の人選と編成、実施までを職務とした恤兵部員川上護の足跡をたどりながら、芸能人、文化人における戦地慰問のあり方を検討した。本稿の考察にあたっては、これまで研究の俎上に載せられなかった川上執筆による「陸軍恤兵部の憶出」（後述）を主資料としたことにより、多くの知見を得た。また、彼が恤兵部から転籍した小笠原諸島父島における要塞司令官としての残痕の現地調査、加えて、少女時代に恤兵部を訪ねた経験を持つ長女に聞き取りを行い、戦中、戦後における恤兵部員とその一家の姿を調査し、判明した諸点について述べた。本稿の最終ページには、川上の恤兵部在任当時の主要慰問団の状況と川上護の行動を一覧表にまとめた。

### はじめに

1939（昭和14）年5月1日創刊の陸軍慰問雑誌『陣中倶楽部』<sup>1)</sup>には創刊から終刊まで扉裏に「本雑誌は国民の熱誠なる恤兵金を以て調整、従軍将兵慰安のため配布するものであります 陸軍恤兵部」との文言が記されている。ここに書かれた「恤兵」（じゅっぺい）とはいかなる意味を持つ言葉なのだろうか。現代では「死語」となった観のある「恤兵」に関して本論を進める前に述べておきたい。『広辞苑』では「(恤) はめぐむの意味。物品、金銭を寄贈して戦地の兵士を慰めること」とある。端的に言えば、恤兵とは慰問と同義の言葉であ

---

1) 陸軍省恤兵部発行、大日本雄辨會講談社編集 現存する最終号と目される第106号は1944（昭和19）年11月1日発行。1932（昭和7）年9月1日創刊の陸軍恤兵部発行・編集の慰問雑誌『恤兵』を引き継ぐ形で、大日本雄辨會講談社が編集を請け負った。戦地の部隊ごとに配布。海軍も慰問雑誌『戦線文庫』を1938（昭和13）年9月10日創刊。こちらは文藝春秋社の実質子会社である、興亜日本社が発行。海軍恤兵係が監修を行い、兵士に各1冊ずつ配布。

図1 陸軍の「従軍手帖」



第14代陸軍大臣板垣征四郎の筆による「恤兵」の二文字と、銃後の国民の写真が刷り込まれている。  
(出所) 筆者所有

る。

この恤兵を指揮、管理した軍の組織は陸海軍恤兵部<sup>2)</sup>であった。

恤兵部の業務内容は①第一線の兵士の慰問、②病院にいる戦傷病兵の慰問、③遺族の弔問、④恤兵（慰問）金品、慰問袋の受領と輸送、⑤恤兵金で戦地の娯楽施設の建造に関与するなど、いわば、恤兵部が国民へのうたい文句としていた「戦地と銃後を結ぶ絆」の役割を担った組織ということになる。

図1が示すように、陸軍兵士が常時携行した1938（昭和13）年発行の「従軍手帖」には「恤兵」の文字と、陸軍恤兵部に献金に来た人々の写真が用いられていることから、兵士の戦意高揚に「恤兵」の存在は大いなるものがあり、軍部は戦争勝利に導くキーワードとして活用していたことが推測できる。

恤兵部の動向は日清戦争時より苛烈な戦争報道と共に、新聞や雑誌等のメディアを通じて、比較的当時の国民に認知されていたが、現在、その存在は一般にほとんど知られていない。近現代史研究家、軍事史研究家らの間でも同様であったが、最近、徐々にではあるが、恤兵部の組織にも言及した研究<sup>3)</sup>が出始めている。

恤兵部は戦争を支援する国民の熱から生まれたもので、熱を支え、加速化させていったのは、愛国心、それ以上に国民の出征兵士に寄せる「情」である。無抵抗で動員されていった夫、息子、甥、従弟、そして、共に夢を語り合った友らへのたぎる愛情と憐憫であった。こ

2) 海軍慰問雑誌『戦線文庫』の奥付によれば、海軍は1944（昭和19）年1月あたりから海軍省恤兵係を改称し、恤兵部となっている。

3) 恤兵の先行研究は竹添敦子（1998）「山本周五郎と『陣中倶楽部』」三重短期大学編『三重法経』110号、三重短期大学。近年では、大沢聡（2022）「恤兵—国家と批評」（第22回）『群像』講談社、重信幸彦（2022）『みんなで戦争 銃後美談と動員のフォークロア』青弓社等が挙げられる。

うした胸の中心にある一番柔らかな感情を恤兵部は巧みにとらえ、結果、国民の「情」は恤兵金や慰問袋に姿を変え、戦地へ送られていった。気づけば、一般大衆は自発的に戦争を支援する側に回っていた。これは極めて重い事実だが、政治的ポピュリズムが一部において拡大している現代において、恤兵部の国民動員機関としての有り様、特に銃後女性を慰問に動員していった事実は検討してしすぎるものではないと考える。

## 第1節 陸軍恤兵部の概要と国民の動態

### 1-1 誕生から日中戦争まで

恤兵部が誕生したのは日清戦争の時にさかのぼる。当時の清（中国）を相手に戦っている兵士を支援しようと、国民が自発的に金品を抱えて陸軍に押しかけ、その受け皿とするために、1894（明治27）年7月17日、陸軍大臣大山巖が恤兵部開設の告知を出している（図2）。陸軍では、国民の熱情に応えるため、急遽、大臣官房から雇員を送り込み、恤兵部の陣容を整えた。

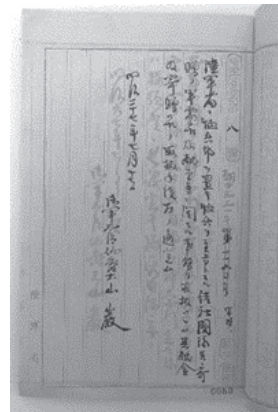
『朝日新聞』をはじめとする新聞各社は恤兵部に献金に訪れる人々を「国民の美挙」という括りで大々的に報道した。この時点で、すでに戦争遂行に向けて軍部とメディアとの協調がうかがえる。しかし、日本が勝利すると恤兵部に訪れる国民はまばらとなり、一旦、閉鎖、雇員も元いた大臣官房に戻る。

改めて、恤兵部が開設されるのは、1904（明治37）年2月、日露戦争時、日本中が大国ロシア相手の戦いで沸き上がった時期である。日清戦争と同様に、熱狂した国民が苦しい家計から捻出した献金や慰問袋を手し、恤兵部の門前に詰めかけた。

この時点で恤兵部の陣容は下記のように整えられ、新聞を通じて国民に伝えられた。

「陸軍恤兵部ニ恤兵監一人部員二人若ハ三人ヲ置ク 恤兵監ハ陸軍佐官 部員ハ陸軍佐尉官同相当ヨリ之ヲ補ス 恤兵部ニ下士判任文官若干人ヲ置ク 部員ハ必要ニ応シ之ヲ増加スル」<sup>4)</sup>

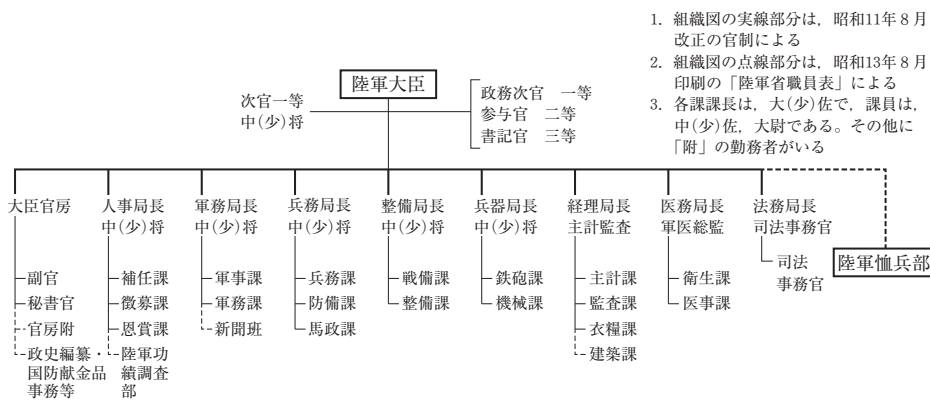
図2 初代、第3代陸軍大臣大山巖による「恤兵部開設の告示」



(出所) 防衛研究所 陸軍省告示第11号 朝第331号

4) 「陸兵恤兵部条例制定の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08070676300, 1904年 陸

図3 陸軍省組織概念図



（出所）『図説 帝国陸軍 旧日本陸軍完全ガイド』（1995）翔泳社

いわば、恤兵部は戦争が起これば立ち上がり、終戦を迎えれば、閉鎖されるといった、ある意味、変動的な部署だったともいえる。その後、満州事変時も同様に再開、一時期の閉鎖期間を経て、1937（昭和12）年9月3日、日中戦争で組織が固定化され、これが終戦まで続く。

1936（昭和11）年、陸軍省には大臣官房と8局18課（昭和11年8月改正の官制）が置かれていた（図3）が、翌年、日中戦争が始まると、大臣官房の国防献金事務、人事局の恩賞課業務、功績調査部、軍務局の新聞班、経理局の建築課業務、陸軍恤兵部などが加わり、省内の職員総数は1,000人近いものになっている<sup>5)</sup>。

1939（昭和14）年、新聞班が陸軍の宣伝、広報、新聞検閲などを管掌した情報部に昇格した際、初代情報部長に就任した清水盛明は前年にこのように述べている。

「由来宣伝は強制的ではいけないのでありまして、楽しみながら不知不識の裡に環境のなかに浸って啓発強化されて行くということにならなければいけないのであります」<sup>6)</sup>

清水が述べた「楽しみながら」「自然に環境のなかに浸って啓発強化されていく」とは、恤兵部が日中戦争後、強化した、表向きには国民の自主的意志による恤兵金や慰問袋献納、

達綴 防衛省防衛研究所。

5) 太平洋戦争研究会（1995）『図説 帝国陸軍 旧日本陸軍完全ガイド』翔泳社、312頁。

6) 清水盛明（1938）「戦争と宣伝」、『思想戦講習会講義速記第二集』内閣情報部。文中の「環境」は、清水盛明（1939）『戦ひはどうか』（実業之日本社、昭和14年）では、「感興」に修正され、誤植の可能性がある。

人気者の芸能人や文化人を使った慰問をイメージさせるものである。

つまり、陸軍恤兵部は大臣官房、さらには情報部の命を受け、端的に言えば、それらの実働部隊として任務を遂行していったのであろうと筆者は考える。

### 1-2 「たぎる愛国の熱情」を煽る

1937（昭和12）年7月7日に盧溝橋事件が勃発すると、新聞はこれまでの戦争報道と同様に、戦況を苛烈に報じ、メディア各社の報道合戦が始まった。

「北支の戦雲いちだんと色濃いなかに銃後を護る国民の熱誠は恤兵金品や慰問文となって16日朝から陸軍省に殺到、この朝から判任官食堂に移転、大々的に店開きした恤兵部員は感激の汗に濡れて大わらわだ。（略）かくして16日朝から正午までの恤兵金は大正12年の精神作興週間以来毎月職員生徒が貯めた88円60銭を持った可憐な児童代表二人が谷藤校長に伴はれて出頭した板橋区志村尋常高等小学校をはじめに52件1500余円の巨額にのぼった」<sup>7)</sup>

「さらに、翌18日の同紙夕刊には、「ターキー<sup>8)</sup>、橘屋 露人まで飛び出す 巷に展く感激の幾シーン」という芝居がかった大見出しが躍り、小見出しは「降り注ぐ献金の雨」と、高揚した調子で始まっている。

「抗日の嵐やまず、ついに17日午前再度の五相会議が首相官邸で開かれた！ 政府の強硬決意！ それに応じて北支戦線の我が将兵へ送る国民の声援はますます高まり、街頭に、陸軍省にその他、いたるところけうも献金の雨、支那の氣勢を突破して熱血の感激と赤誠が国をあげて銃後いっぱいには拡がった」

記事の脇には陸軍の慰問金受付所に押しかけるトップスターの水の江瀧子を含む松竹少女歌劇団一行や1,000円を恤兵監に手渡す歌舞伎役者の市村羽左衛門などの写真が載っている。まさに、献金会場前で繰り広げられた一大ショーである。つまり、すでに、この時点で、陸軍では著名な芸能人や文化人を前面に押し出し、メディアによって恤兵行為をアピールする政策シナリオが定まっていたということだろう。

戦時中における女性大衆のプロパガンダ研究を行っている若桑みどりは「国民は政策によ

---

7) 『読売新聞』1937（昭和12）年7月17日付夕刊、3面。

8) ターキーこと水の江瀧子を中心とした松竹歌劇団は宝塚歌劇団と人気を二分し、1937（昭和12）年に行われた大阪歌舞伎座の新春興行ではターキー見たさに、大勢のファンが列をなした。

って心を動かさないということだ。政策や法は国民を物理的に動かすが、内面から国民を動かすには『文化』を動員しなければならない<sup>9)</sup>と総動員体制下の大衆動員に「文化」の重要性を述べている。核心をつく指摘であると共に、国民の恤兵が軍部の文化政策の一環であることを示唆している。

### 1-3 変革を遂げた皇紀二千六百年の慰問状況

過去の例が示すように、戦争の開始直後は、兵士を応援する気持ちも盛り上がり、恤兵も盛んになるのだが、長期化すると、国民の気持ちも冷えていく傾向にある。同様に恤兵金の額も減少の傾向を示している（表1）。

日中戦争が3年目を迎えた1940（昭和15）年は『日本書紀』によると、神武天皇の橿原宮での即位から二千六百年に当たり、この国家的奉祝を利用して、再び、国民の戦争熱を煽り、戦地への支援につなげようとする動きが恤兵部で加速する。

慰問団にもテコ入れが行われた。1940（昭和15）年5月までは恤兵部の他、各地の警察署長で証明書を発行し、それがあれば、戦地に渡航ができた。そのため、警察署の証明だけで慰問に加わる人々が目立ち、観光気分で渡航するという現象が戦地では多発していた。

そこで、恤兵部では「慰問者の資格を制限し、真に慰問しようとする熱意のある人々のみ、恤兵部から渡航証明書を下付する」<sup>10)</sup>と修正を加え、恤兵部が慰問団の人選に慎重に取り組むことになったのである。結果、「（昭和15年は）記念すべき聖年であつたのに鑑みて、主要演藝各會社の協力を求め、一流演藝家を多数現地に派遣して、各位の希望に沿ふことに努めたから相當慰安に利用せられた」<sup>11)</sup>のである。表2に示したように、昭和14年度と昭和

表1 事変以来の恤兵金献納の状況

年 度	恤兵部受付	軍師団受付	総 額
昭和12年度	883万1,488円	370万8,791円	1,254万 279円
昭和13年度	627万8,273円	421万7,127円	1,049万5,400円
昭和14年度	286万1,498円	438万4,837円	724万6,335円
昭和15年度	316万2,860円	328万 720円	644万3,580円
総 額			3,672万5,594円

日中戦争開始時より、年々減少する恤兵金。

（出所）陸軍恤兵部（1941）『陣中俱樂部』第65号 昭和16年4月1日発行より作成。陸軍恤兵部員 浅沼吉太郎の発表による。ただし、昭和15年度分の恤兵部受付は12月末まで。軍師団は11月末まで。年度は、会計年度による

9) 若桑みどり（2000）『戦争がつくる女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』ちくま学芸文庫、69頁。

10) 陸軍恤兵部（1941）『陣中俱樂部』第62号、昭和16年1月1日発行、大日本雄辨會講談社、30頁。

11) 陸軍恤兵部（1941）「昭和15年に於ける恤兵状況概観」『陣中俱樂部』第62号、昭和16年1月1日



表2 恤兵部が公表した慰問団派遣年度別表

区分	昭和14年度					区分	昭和15年度				
	満州	北支	中支	南支	計		満州	北支	中支	南支	計
団数	7	9	10	6	32	団数	8	16	17	8	49
延人員	61	69	86	53	269	延人員	68	136	131	76	411

(注) 恤兵部主催演芸慰問団派遣年度別一覧表 11月現在

(出所) 陸軍恤兵部(1941)『陣中俱樂部』第62号、昭和16年1月1日発行を参考に作成

15年度の慰問団派遣を比較してみると、恤兵部の努力の成果か、団数、人員共に増加しているのである。

さらに、『陣中俱樂部』74号<sup>12)</sup>では、恤兵監は再び、慰問団のレベルアップに触れ、「在東京の芸術家の殆ど全部を網羅しある芸術文化連盟が芸能奉公の趣旨より、恤兵部の要望に従い、慰問演芸団の編成に当たること」になり、「更に立派なる演芸家を戦線に送りたい」と述べている。これは『陣中俱樂部』の読者である戦地にいる多数の兵士に向けた、ある意味、強固な決意表明であろう。

## 第2節 恤兵部員が動員した芸能人、文化人

### 2-1 負傷して恤兵部に配属

恤兵部が1940(昭和15)年を中心に飛躍的な変化を遂げた背景には一人の人物がいた。1939(昭和14)年に恤兵部に配属になった部員の川上護中佐である(図4)。この節では、川上が遺した「陸軍省恤兵部時代の憶出」<sup>13)</sup>より、彼が立案し、実行した恤兵部の慰問政策を明らかにする。

まず、川上が恤兵部に配属にされた経緯から始めよう。

「私は昭和14年4月24日、当時鳥取歩兵第40聯隊第1大隊長として徐州攻撃に参加し、不幸突撃直前敵弾を受けて(中略)病院船にて内地に送られ、大阪赤十字病院、鳥取赤十字病院等にて約10か月余の療養を経て、陸軍省恤兵部勤務を命ぜられる。陸軍省に於

発行、大日本雄辨會講談社、3頁。

12) 1942(昭和17)年1月1日発行、大日本雄辨會講談社、48頁。

13) 『南支のあゆみ』所収。『南支のあゆみ』は、歩兵第137聯隊(別名鳳第8972部隊)元連隊将校たちが主となって結成された戦友会「鳳会」執筆、編集の冊子。1938(昭和13)年6月部隊を結成してから1946年4月部隊を解隊するまでの行動を記録、保存目的で発行された。編集責任者・森源発行所・鳳会。1967(昭和42)年10月22日発行。聯隊長だった川上護はこの冊子の扉に書名を揮毫し、巻頭に「陸軍省恤兵部の憶出」、その他、「軍用犬物語」「聯隊長発令から部隊に着任までの憶出」を寄稿している。

ける第1線受第1傷将校の命課なるは後日知り得た」<sup>14)</sup>

着任後、川上はすぐに当時の陸軍次官、阿南惟幾中将のもとに呼ばれ、「第一線の将兵の立場において意見具申せよ」と命じられ、「受傷校の最初の重責」<sup>15)</sup>を痛感したという。

鳥取歩兵第40聯隊第1大聯隊長だった川上が恤兵部に配属になった理由は、「第一線将兵の立場」、つまり、現場からの、リアリティのある助言を阿南以下恤兵部が渴望していたのである。これは戦地の兵士に恤兵金品を送る業務を担いながらも、この時点では、実際に戦闘体験を持つ恤兵部員が皆無、または乏しかったことを意味しているのだらう。

川上は我が意を得たとばかりに、すぐに以下の2点を検討項目として提言した。

- ① 慰問袋の内容の改善
- ② 内地よりの慰問団の派遣の改善

当時の恤兵監は佐々眞之介大佐だったが、恩賜課長も兼任していたため、陸軍省でも最も多忙な課長であった。そのため、恤兵業務は恤兵部員に一任となっていた。川上はこの時点で、階級は歩兵中佐であったものの、上官である佐々の承認を得て、阿南惟幾中将に自らの改善案を進言し、陸軍大臣板垣征四郎にも許可を得ることに成功した。

## 2-2 慰問改善案の提出と実行

川上が「早期改善の爲第一步を踏み出した処置」とは次のようなものである。

東京の百貨店各営業主任を恤兵部に招聘し、慰問袋の内容改善、加えて、第一線将兵の労に報いるため、慰問袋には慰問文を同封するよう指導を行う。川上の改善策は本人によれば、即日、各百貨店に伝達され、慰問袋に入れる慰問品売り場が特設された<sup>16)</sup>。

図4 陸軍恤兵部の職員図（抜粋）

陸軍恤兵部			
同	同	同	恤兵監
(兼)主計大尉	主計大尉	(兼)主計少佐	(兼)主計少佐
△渡多野光次	△莊野秀喜	△寺々力龍三	△本城良護
			歩兵大佐 佐々眞之助
			歩兵中佐 川上護

(出所) 防衛研究所『昭和15年1月陸軍省職員表』

14) 川上(1967)「陸軍省恤兵部時代の憶出」『南支のあゆみ』所収、1頁。「約10か月余の療養を経て」とあるが、昭和14年7月25日の双葉山慰問の手配をしていることや昭和14年10月25日発行の「支那事変恤兵美談集 第1輯」(発行 陸軍恤兵部)の奥付に「指導 陸軍歩兵中佐 川上護」の記述があることから、もっと早く恤兵部に移籍したことが予想される。

15) 前掲書『南支のあゆみ』1頁。

16) ただし、デパートの慰問品売り場は1937(昭和12)年すでに日本橋白木屋で始まっている。1937(昭和12)年7月21日発行の朝日新聞には「澎湃たる将兵慰問の声。先ず白木屋にご相談ください。



特に、川上がデパート側に要請したのは、慰問品売り場のコーナーには慰問袋に同梱する便せん、封筒を用意することだった。彼は自らが負傷し、長期入院生活を経験しているため、入院中に届く慰問袋、慰問状がどんなにか兵士の心の空洞を埋め、生きる希望をつなぐことができるか、その心情を熟知していたと考えられる<sup>17)</sup>。彼は慰問袋、慰問状を銃後（前線に対し、後方で戦争を支援する国民）と戦地との心の連絡と捉え、物よりもメンタル面を重要視し、それを強く訴え続けた。

1940（昭和15）年暮れには、川上の努力が功を奏したか、日本橋、新宿、銀座の三越デパートで、「皇軍慰問品売り場」を開設し、人目を引くように美しい女性販売員を立たせた。売り場は活況を呈し、デパート調整の慰問袋は飛ぶように売れた<sup>18)</sup>。

『陣中俱樂部』皇紀二千六百年記念（1940（昭和15）年1月1日）では、巻頭グラビアページには「恤兵部公認による京浜百貨店聯盟の慰問品展覧会は各デパートで盛大に行はれ、『兵隊さんの心から喜ぶ慰問品を……』といふので各会場何れも非常な盛況であった」とキャプションが付けられ、売り場に押しかける人々の写真が掲載されている。

川上の慰問袋改善案は新聞を通じて話題となり、彼は東京、大阪、福岡、新潟等、地方の会場に足を延ばしたほか、1939（昭和14）年12月にはラジオ放送 JOAK でもその重要性を訴えた。

戦時下、国民の贈与であった慰問袋について山口睦は「慰問袋や慰問状に関しては、物資よりもその精神性が強調され、兵士の士気高揚と内地の非戦闘民に情動的な戦争参加を促す働きを持っていた<sup>19)</sup>」として、慰問袋の精神性＝情を強調する。

山口が述べるように、川上案は兵士の「士気高揚」と、銃後も共に戦っているという「情動的な戦争参加」を促進させる、ある意味、両者の心理を突いた巧みなものともいえるだろう。また、重要なことは上（軍部）からの強制でなく、下（銃後）からの自発性を引き出したことだ。

### 2-3 慰問団の編成に腐心

川上が提示した第二の改善案は慰問団の派遣に関してである。慰問団を編成する際には、

---

陸海軍将兵慰問袋 ご調整申し上げます」という白木屋の広告が掲載されている。

17) このアイデアはそもそも兵士と東京商工団体銃後援連盟の座談会「帰還兵と関係者と語る会」において、兵士の発言から川上がヒントを得たと思われる。恤兵部と銃後団体はしばしば「語る会」を催し、意見を交換、恤兵部はそれを参考にした。東京商工団体銃後援連盟（1940）『商工銃後』第2巻第1号、昭和15年1月1日、20頁。

18) 押田信子（2019）『抹殺された日本軍恤兵部の正体—この組織は何をし、なぜ忘れ去られたのか？』扶桑社新書、163頁。

19) 山口睦（2011）『戦時下の贈与—近代日本社会における国民的贈与の創出』『文化人類学』。

戦地に慰問団員の親戚関係の兵士もいることを考慮し、派遣地と部隊の選定は恤兵部が決定することを上官に願い出て、許可された。

改善案の実施に当たっては、次のように述べている。

「私案が全軍に影響すると思い、責任の重大なるを痛感し、第一線の所感如何と、北満より南支に亘り、意見聴取に努力した。(略)時に恰も皇紀年の紀元節前後にて、台北の陸軍病院に傷病将兵を慰問し、共に紀元節の歌を合唱せるも奇しき因縁であった。各種慰問団派遣に当っては該地区の戦況及び慰問上の注意等を談り万遺漏なきを期した」<sup>20)</sup>。

『陣中倶楽部』の「恤兵日誌」には、しばしば川上が出張と称して、戦地に赴き、慰問団の調整、慰問袋や恤兵品の輸送状況視察などを行っていることが記されている。しかし、最も、彼が心血を注いだのは慰問団の人選と編成で、派遣した慰問団は次のように分類できる。

#### ① 歌手がメインの歌舞慰問団

最も好評で回数も多かったのが、人気歌手による歌謡ステージである。当時の一流歌手は競って参加を希望し、その選定、方面決定には心労があった。「当時の一流歌手にて外地に出でざるは船酔に弱き山田五十鈴のみ<sup>21)</sup>。従って、歌手の中では慰問旅行中、受傷せるものも生じ、服部富子は最も重く帰還後入院加療した」と川上は述懐している。

#### ② 漫 談

お笑い系の慰問団は川上によると、「男女色々特別の御面相のもの」もあったようだが、詳しい言及はされていない。

#### ③ 漫画慰問団

漫画家には入院中の将兵を慰問し、将兵ひとりひとりの似顔画を描くように指導した。第1回は一流漫画家たちを指名し、5人1隊で出発、現地では、1人1筆5分以内で仕上げた。この早業に兵士から歓声が漏れたという。

20) 前掲書『南支のあゆみ』2頁。

21) 山田五十鈴(2000)『山田五十鈴 映画と共に』(日本図書センター、105頁)によれば「陸軍関係は上海にいた時など大日方伝さんたちと一緒にずいぶん出掛けていったものです。(略)ところが若い女優さんたちを引率してゆくと、将校たちが酔った勢いで若い女優さんたちを連れてどこかへ消えてなくなろうとするので、私はそれがこわくて、どうしたら無事に連れて帰れるかと思って、口惜しくもあり、軍人に対する反感が一ぱいでした」とある。山田が上海に行ったのは、1941(昭和16)年2月～4月である。つまり、川上が小笠原に転勤になってから山田は慰問団に参加したことになる。

#### ④ 生花慰問団

1940（昭和15）年5月12日～6月18日まで草月流家元勅使河原蒼風をリーダーに、門下の女性一行が生け花慰問団を編成し、上海、蘇州、南京、大連、新京、ハルビン等で、現地部隊、陸海軍病院を慰問した。その際、故国の花を届けたいとの思いで、花材は内地の花を使い、現地の器材を利用して、見事な生け花を披露した。

川上と勅使河原は慰問を通し懇意になった形跡が見られ、勅使河原は川上に恤兵部在職時、中野区大和町にあった川上の自宅に1通、1941（昭和16）年には赴任した小笠原諸島父島の川上に1通、書簡を送っている。どちらも当たり障りのない、挨拶状であるが両者のつながりをうかがわせるものである。

#### ⑤ 画家慰問団

文展審査員、特選受賞クラスの画家たちで慰問団を編成し、軍奮戦地の風物を描くよう依頼した。でき上がった画は絵葉書に印刷し、現地軍に送って将兵が郷里へ通信する際に使用するよう指導した。

#### ⑥ 相撲慰問団

徐州攻略戦後、そのまま駐留する北支軍に当時、実力、人気共にトップだった横綱・双葉山一行を1939（昭和14）年に派遣した。興行は主要都市に限り、力士は20人限定の比較的小規模な慰問団として出発した。ところが、内地で評判の良い双葉山が来たため、北京、天津、済南の居留民に取り組みを見せてもらいたいと懇願され、当時の北支那方面軍司令官寺内寿一も同意し、居留民にも観戦の機会が与えられた。

双葉山らの力士には相撲協会から給与が支給されたが、双葉山は全額、北支軍司令部に恤兵金として献金した。後日、軍司令部より双葉山に立派な金杯が贈呈された。

①～⑥に挙げた慰問団の編成からうかがえるのは、企画立案者だった川上が戦地では容易に得られない、兵士の渴望する「笑い」「感動」を念頭に置き、人選にあたったことだ。人気、知名度共に高い映画、歌謡、演芸等の、いわゆる大衆娯楽界のスターに的を絞り、慰問団を戦地に誘致している。さらに、慰問団には銃後の人々に、恤兵部の用意した会場で成果報告を義務づけた。慰問した芸能人、文化人は今でいえば、話題を拡散させる、恤兵部公認のインフルエンサーの働きを課したことになるだろう。インフルエンサーたる彼らは、日本に戻るやいなや、報告会は言うに及ばず、芸能人は慰問を題材にした興行やショーを行い、文化人の場合は慰問体験談を著作や講演会で披露した。これをメディアが報道し、銃後は戦争の話題で沸きあがった。

しかし、その裏で、慰問団の中では、思わぬ惨劇も生じている。よく知られたところでは、1941（昭和16）年7月には陸軍恤兵部派遣北支皇軍演芸慰問団の団長、吉本興業専属・桂金吾夫人の漫才師・花園愛子が慰問地から移動するトラックの中で、匪賊の襲撃を受け、

死亡した事件がある。花園の死は「名誉の死」として扱われ、陸軍では盛大な慰霊祭を行っている<sup>22)</sup>。この他、中支を慰問していた女浪曲師が敵の銃弾を受け、怪我を負う<sup>23)</sup>など、兵士にひと時の慰安を与えた行為と引き換えに、慰問団は生命の危機に晒されたのである。

### 第3節 皇室、女性文学者との絆

#### 3-1 皇室の恤兵奉仕

「陸軍省恤兵部時代の憶出」には、皇紀二千六百年に一恤兵部員である川上が皇室に呼ばれ、皇族より慰問袋を拝受した短い記述が発見できる。

「皇紀二千六百年紀元節に当り、各皇族ご一統にて慰問袋の御寄贈有り「浜離宮」に陸海軍代表を招致せられ、当番幹事朝香宮大将宮始め各皇族方全部お揃いの上、大広間一杯の各宮様区分の山積する慰問袋の中間に、陸軍代表として小官、海軍代表として同経理部員茶谷少佐<sup>24)</sup>……(略)、最敬礼をして普通の高さのテーブルに匿れる位に敬礼、厳粛なる場面を思わしめる想出の最も深い写真が今も残っている。右慰問袋は由緒を特記し各軍に分配した」

と、感慨を込めて述べている<sup>25)</sup>。

川上が朝香宮に謁見したその年の年末、朝日新聞紙上で「各妃殿下畏しけふも恤兵奉仕」という見出しの記事が出る。高松宮妃、閑院若宮妃、久邇宮大妃、梨本宮妃、東久邇宮妃らの各妃殿下が梨本宮妃総裁の日本赤十字社篤志看護婦人会へ赴き、恤兵奉仕の作業をストーブのない作業室で包帯の機械巻きなどの作業を2時間にわたって熱心に続けられたことを報じた<sup>26)</sup>。

日本赤十字社は、古くは西南戦争を皮切りに、太平洋戦争まで軍と一体となって行動し、社則に「報国恤兵」を掲げている。川上たち一行が謁見するはるか前に、皇室と恤兵は強固な鎖で結ばれていたことになる。

22) 陸軍恤兵部(1941)『陣中俱樂部』第70号、昭和16年9月1日発行 84-85頁。

23) 「女浪曲師戦傷」『読売新聞』1939(昭和14)年4月28日付朝刊。

24) 海軍経理課茶谷東海のこと。

25) 川上は同日の出来事の詳細を「皇族御下賜慰問袋の拝受の記」という題名で、『陣中俱樂部』第64号(1941(昭和16)年3月1日 26-28頁)に執筆している。文末で川上は「恤兵部は感激の仙境である。恤兵部の服務は感激の連続であり、自己の『みにくさ』を痛感することである」と自省的に文を結んでいる。

26) 『朝日新聞』1941(昭和16)年12月11日付朝刊。

### 3-2 女性の権利獲得を掛けた慰問活動

女流文学者長谷川時雨がリーダーとなって、1938（昭和13）年、全員女性作家、女性文化人による慰問部隊「輝ク部隊」が結成され、1940（昭和15）年1月1日、陸軍恤兵部から戦地に向け、慰問文集『輝ク部隊』<sup>27)</sup>、海軍恤兵係から『海の銃後』<sup>28)</sup>が出版された。両文集とも企画、実質の編集作業は『輝ク部隊』部隊員が行い、制作資金は国民の献金である恤兵金があてられた。陸軍側の文集の発行にも川上護は実質、編集統括責任者として関与し、「輝ク部隊」の活動を支援した。

女性文壇界の指導者的存在だった時雨は1937（昭和12）年頃から「輝ク部隊」の機関紙『輝ク』を陸軍に献納、病院慰問、作家によるサイン会などを積極的に催し、売上金を寄付する等、陸軍恤兵部の銃後へのPRに欠かせない存在となっていた。女性の地位向上を目指していた時雨や部員にとって、銃後の力を必要とする戦時の今こそが、権利獲得の好機ととらえた上での活動だった。

さらに、慰問文集発行も時雨側からの積極的な働きかけによるものだったが、恤兵部にとっても、願ってもない話であった。兵士の文字に対しての渴望を『陣中倶楽部』に届く兵士の投書や戦地に派遣された記者を通して知っていたからである。

両者のタッグはスムーズに進行し、早速、朝日新聞が慰問文集の誕生を次のように記事にしている。

「長谷川時雨女史主宰の「輝ク會」は今春その別働部隊『輝ク部隊』を結成して以来、東亜建設の理想に向かって愈々実践の歩みを起こすべく慰問袋の調整や、前線勇士の遣児訪問、又は大陸開拓者への激励等に銃後インテリ女性の赤誠を披歴しつつありましたが、折から嚴冬に向かう荒涼たる大陸で、守備討伐の任につく兵隊さん達に楽しい慰問を贈りたいものと考えた末、腕に覚えの文筆で慰めることに審議一決、早速、当事者も大いに感激して、陸軍は恤兵部発行月刊雑誌『陣中倶楽部』に、海軍は同じく『戦線文庫』に夫々正月号付録として収録する事になり、ここに女流作家群の慰問文集と云う空前の豪華慰問品が、新春のお年玉として戦線に送られることになりました。」<sup>29)</sup>

これまで、女性蔑視の矢面に立たされていた時雨一行だったが、翼賛一辺倒のメディアは

27) 陸軍恤兵部発行、日本雄辨會講談社編集。A5判、総頁256頁、非売品、部数11万部、執筆者59名、『陣中倶楽部』の付録扱い。

28) 興亜日本社発行・編集、海軍軍事普及部指導、海軍省恤兵係監修。四六判、総頁230頁、部数不明、執筆者48名、『戦線文庫』の付録扱い。

29) 『朝日新聞』1939（昭和14）年11月23日 朝刊。

挙って手のひらを返したような賛辞を送ってきたのである。

『輝ク部隊』の寄稿者には漢口一番乗りを果たした売れっ子作家の林芙美子、窪川（佐多）稲子、宮本百合子、円地文子ら59名の女性作家が顔を揃えた。文集は戦地の兵士に好評を博し、時雨一行の輝ク部隊の名は戦地で急速に広がっていった。1940（昭和15）年は恤兵部が新機軸を示した年であったと前述したが、この年、「輝ク部隊」もまた、恤兵部を後ろ盾に、活発な慰問活動を展開した。その様子を『陣中倶楽部』の「恤兵日誌」が頻回に報道している。結果、恤兵部、女性文化人の強固な戦争支援の布陣が、メディアによって銃後にも戦地にも拡散され、揺るぎないものとなっていく。両者の連携の立役者として川上護の存在があったことは忘れてはならない。

表3は1940（昭和15）～1941（昭和16）年における、「輝ク部隊」の慰問活動、それに伴う川上との慰問を通しての交流を一覧表にしたものである。両者の親密な関係性が伺える。

しかし、順調に育まれたかに見えた両者の関係が、2月の川上の小笠原父島転出によって終止符が打たれ、発行予定だった慰問文集第2弾も中止が決まる。理由としては、文集制作に理解を示した川上の跡を引き継ぐ部員も現れず、陸軍にしても太平洋戦争を眼前にして、精神面でも、経済面でも、女流文学者の慰問文集を作る余裕など、微塵もなかったことが挙

表3 輝ク部隊の慰問活動

1940（昭和15）年

5月22日～6月28日	輝ク部隊一行7名中南支慰問
7月7日	事変4周年記念日のため、世田谷陸軍病院大蔵分室慰問
9月8日	輝ク部隊青年部主催講演と映画の会の打ち合わせ。陸軍川上中佐出席し、軍人援護事業に付いて懇談
11月22日	慰問文集の打ち合わせのため、長谷川時雨海軍省恤兵部に茶谷少佐を訪問
12月11日	長谷川時雨、熱田優子 陸軍省に川上中佐を訪問、第二回慰問文集、表紙絵、口絵等を納めた
12月19日	輝ク部隊青年部代表、川上中佐を訪問し、母子寮児童指導状況を報告
12月23日	陸軍省恤兵部川上大佐（筆者注：中佐の誤り）に第二回慰問文集原稿を依頼 午後、青年部児童指導最終日にて川上中佐、玄國寺に指導状況視察、児童一同に恤兵エハガキを持参する

1941（昭和16）年

1月4日～2月11日	輝ク部隊南支慰問に赴く。部隊慰問、病院慰問、文芸班は長谷川時雨、円地文子、熱田優子、演芸班は3名
2月4日	川上中佐栄転のため、輝ク部隊より、理事の井上鶴子、黒田米子が陸軍省恤兵部へ挨拶に出向き、新任の川崎中佐に紹介される。
2月7日	黒田米子ら川上中佐の出発（父島渡航）を芝浦ふ頭に見送る

（出所）尾形（1988）、『復刻版 輝ク』ドメス出版を参考に作成



げられる。一方、海軍の慰問文集『海のつはもの慰問文集』は1941（昭和16）年1月1日発行され、第1集に比べ、装丁が劣化し、減ページになっているものの、戦場の兵士たちの手に渡っている。だが、海軍の慰問文集が2冊出版に至ったことは、明確な理由は不明である。尾形は「これら二つの文集成立の経過は『輝ク部隊日誌』にかなり詳しく辿ることができるのだが、『海の勇士慰問文集』についてはもうひとつはっきりとしない」と述べている<sup>30)</sup>。

#### 第4節 小笠原諸島父島の要塞司令官から南支へ

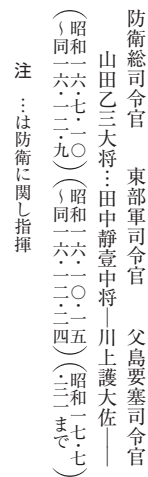
##### 4-1 要塞司令官時代の石碑

川上は恤兵部における任務を終え、1941（昭和16）年1月25日付けで父島要塞司令官を命じられ、父島に渡った。ここで、川上が着任した戦時下の小笠原諸島について簡単に説明する。

大正時代、小笠原諸島は南洋委任統治領と本土との中間にあって、日本に向かう米軍の対日作戦路の防衛基地として、重要な地であった<sup>31)</sup>。陸軍は1923（大正12）年3月父島要塞司令部を新設し、1927（昭和2）年要塞防備教令を制定して離島防衛における防空、沿線警戒及び戦時警備等を定めた<sup>32)</sup>。1933（昭和8）年日本は国連を脱退し、ワシントン条約を破棄する。1936（昭和11）年3月、国内防衛に関する陸海軍任務分担協定及び要塞地帯法の制定により、「父島要塞地」の防衛は陸軍の担任となった<sup>33)</sup>。そして、1941（昭和16）年に川上護が要塞司令官に就いた（図5）。川上は開戦時の12月8日には「父島要塞ハ来襲敵機ヲ撃墜スルノ外 海軍ト協同シ父島本島ヲ確保シ且勉メテ母島本島ヲ確保セントス」との命令のもとに、主力を父島の防禦に置いた<sup>34)</sup>。

昭和16年8月25日に川上護は大佐に任命され、翌年の

図5 父島の司令系統



父島要請司令官に「川上護」の名が記載されている。

（出所）防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』第13巻

30) 尾形（1988）238頁。

31) 防衛庁防衛研修所戦史室（1968）戦史叢書 第13巻『中部太平洋陸軍作戦（2）ペリリュー・アンガウル・硫黄島』朝雲新聞社、247頁。

32) 同上。

33) 同上。

34) 防衛庁防衛研修所戦史室（1968）戦史叢書 第13巻『中部太平洋陸軍作戦（2）ペリリュー・アンガウル・硫黄島』朝雲新聞社、250頁。

図6 要塞神社の建立記念碑



裏面の「陸軍大佐 川上護」と刻まれたと推定する文字は剥落している。  
(出所) 筆者撮影

5月頃、父島字西町に要塞神社を建立したとみられる。小笠原村教育委員会の戦跡調査報告書によると「日米開戦となり、国防の第一線としての父島要塞の健闘を祈願して建立されたものと推測される」と記されている。

さらには、要塞神社の建立を記念して石碑が立てられ、正面には「要塞神社」、裏面には「第十二代」（以下剥落し、解読不明）、陸軍大佐（以下剥落し、解読不明）と書かれている<sup>35)</sup>(図6)。この碑の文字から、「第12代父島要塞司令官 陸軍大佐川上護」が建立したものと推定できるだろう<sup>36)</sup>。

川上は戦闘とは無縁だった恤兵部とは異なる、重要な国防の地に送り込まれ、兵士の士気を高め、部隊の団結を揺るぎないものにするため、山中に戦争勝利を祈願する「要塞神社」を建てたと、推測する。

父島で川上の部下であった亀田五三二の「父島軍隊日記」<sup>37)</sup>によると、1942（昭和17）年5月14日には要塞神社で賑やかな祭りを催している。この祭りが建立を祝うためのものであるか、司令官だった川上がどのような形で祭りに関与していたかは日記には記されていない。

だが、小笠原父島の要職についたものの、川上は対米国との戦闘を経験せず、1942（昭和

35) 現在は大根山村道の入り口交差点脇北側にある。

36) 小笠原村教育委員会（2002）「小笠原村戦跡調査報告書」。

37) 父島在住・吉井信秋所有の亀田五三二の日記（原本の複写）によると、亀田は入柳部隊小隊3分隊所属、昭和16年9月26日小笠原に到着、直後、「司令官川上大佐」の訓示を受けている。なお、同日誌は吉井による「マルベリー・ブログ」で公開している。

17) 年 8 月 1 日付けで独立歩兵第137聯隊長を命ぜられ、父島の任務から離れ、新しい赴任先に向かう。

亀田の日記には8月3日、「栄転されるので、その挨拶に、今日夜明山に来られた」、2日後の5日には「川上大佐もここの司令官を交代して、今日の夕方、芝園丸に乗り込んだ」とあり、川上が父島を去る様子が記されている。なお、小笠原にも慰問団が訪れ、慰問袋が届いた記録が亀田の日記に見いだせるが、これが元恤兵部員川上の誘致によるものかは不明である。

図7 南支に派遣された女性慰問団、慰問演芸の一場面



(出所) 『南支のあゆみ』(1967)

#### 4-2 南支に訪れた女性慰問団

南支第4代聯隊長に転出した川上は到着後すぐに、護衛兵を付けられて、出動地源潭墟に着任した。9月初め、川上の部隊に内地から慰問団が来て、特設ステージで歌や踊りを披露してくれた。彼はよほど感激したらしく、その様子を『南支のあゆみ』でも書いている。

「遙々遠くから、危険を冒して来られ、又久方ぶりに和服姿などを見ると、戦陣の苦勞をも忘れ、唯々なつかしく嬉しい慰めとなった。こうした第一線の労苦をねぎらう慰問団も一番最初陸軍省に於て慰問袋や慰問団派遣について、計画立案した人が聯隊長であることを知ろう筈もない」<sup>38)</sup>(図7)

以後、川上は歩兵第137聯隊長から、1945(昭和20)年6月に独立歩兵第13旅団長に就任し、終戦まで広東周辺地区の警備に就いた<sup>39)</sup>。新聯隊長に着任した当時の川上は部下の目から見ると、「体軀小なりと雖もキビキビした好感が持てるナ、との印象であったが、今でもその通り好かれる人」<sup>40)</sup>との記述が見られることから、恤兵部時代から引き続き、人当たりの良さと社交的な性格で、部下の兵士の信頼も厚かったと推測できる。

終戦後はそのまま広東郊外で集中野営生活を送り、復員して日本の土を踏んだのは1946(昭和21)年6月頃であった。

38) 前掲書『南支のあゆみ』124頁。

39) アジア歴史資料センター グLOSSARY「公文書に見る終戦」。

40) 高沢誠一(1967)「思い出のままに」前掲書『南支のあゆみ』6頁。

## 第5節 川上護の戦後

### 5-1 長女への口述調査

川上護は父島要塞司令官になるまで1年半にわたり、恤兵部員として銃後と戦地をつなぐ役割を自ら率先するように担っていった。明朗な性格が慰問団の編成などで対外折衝の多い、見方によっては骨の折れる仕事に、うまく適合したのかもしれない。

ここに恤兵部時代の川上、そして、終戦後の川上を語る人物がいる。彼の長女小芝敦子（旧姓川上、1930（昭和5）年2月6日生）氏である。筆者は2022（令和4）年夏、彼女に、父親川上護の恤兵部勤務時代のエピソード、終戦後の歩みについて電話でインタビューさせていただく機会を得た<sup>41)</sup>。

戦後78年が経過し、戦争の時代の記憶が風化しつつある今、「恤兵」という名の、国民の戦争協力の一つのあり方を考える上で、この語りは貴重な証言であると考ええる。

本論文の締めくくりに、当日、聞き取りをした内容を公開する。インタビューは、敦子氏が高齢（昭和5年生まれ、取材時92歳）であること、また、両目の視力を失い、障害者手帳を保持しているなどの点を考慮し、短時間の聞き取りとした。

戦時下、軍部の一ポジションとして存在した、恤兵部に対して、生の声を聞けるチャンスはもはやほとんど絶無であることを考えれば、研究者としてこの数十分は二度と訪れることのない、得難い時間であると思えた。なお、川上を主体とした敦子氏の語りは、川上が恤兵部在職の時は、敦子氏がまだ10歳頃の出来事のため、記憶が薄れている。故に、口述の内容は自然と思い出が鮮明な戦後が中心になった。直接、川上の恤兵部在籍当時に関連する話ではなかったが、一恤兵部員だった軍人とその家族が戦後をどう生き抜いたか、本稿のテーマと無縁であるとは思えず、記録した事項を記述する。

父を迎えに恤兵部に行く

筆者 敦子さんはお父様に会いに恤兵部に行かれたことがあると伺いましたが<sup>42)</sup>。

敦子 はい、私が10歳くらいの頃、父を迎えに恤兵部に行きました。

筆者 何か用事があったのですか。

敦子 いいえ、「おいで」と言われたから、迎えに行って、一緒に帰ってきただけです。

筆者 その時、恤兵部の中をご覧になられましたか。

敦子 いいえ、ただ、入り口付近で待っていて、父がすぐ出てきて、一緒に帰りました。そ

41) 聞き取り調査は2022年8月25日に実施。

42) これは事前に、富山在住の敦子氏の知人から、伺っていたことを踏まえた上での問いである。

れだけですね。私は幼かったので、それくらいしか、記憶に残ってないのです。

筆者 恤兵部の仕事内容について、伺っていたことはありますか。

敦子 慰問袋とか、慰問団を送る仕事だということはどういうふうに聞いていました。

筆者 軍の方に話めていて、あまり自宅には戻って来られなかったんですか。

敦子 いえいえ、当時、私たちは一家で中野区に住んでいまして、父は家から恤兵部に毎日出勤していました。

筆者 『陸軍恤兵部時代の憶出』によると、徐州で怪我をなさって、療養され、それで恤兵部に行かれたということですが。

敦子 はい、そうです。傷痍軍人になって、徐州から大阪赤十字病院、鳥取赤十字病院に行つて、それから恤兵部に転勤になったと思います。私も鳥取の学校に転校していたんですが、恤兵部に行く辞令が出た父に付いて、東京にきました。

筆者 お父様は恤兵部では戦地の経験をもとに、次々とアイディアを出されて、デパートで慰問品を売る際に慰問文を付けることなど、銃後の人間に向けて、指導の先頭に立たれました。指導に当たっては、銃後と兵士との心の交流を大事に考えていらっしゃる点が目につきます。この点についてなにか、お聞きになっていますか。

敦子 いえ、私は、そのことは全然聞いていません。まだ、小学校3、4年生で子供でした。幼かったんです。家族は両親と、私、私の下に弟、その下に妹が二人います。弟は3年前に亡くなりました。

筆者 恤兵部では北支、中支にも慰問関係の仕事でたびたび出張していたようですが、戦地のことについてお聞きになっていることはありますか。

敦子 記憶にないですね。父は戦争中のことはあまり喋りませんでした。

筆者 その後、恤兵部から小笠原諸島の父島に着任されましたね。ご家族の方も父島に一緒に行かれたんですか。

敦子 はい、みんなで行きました。

私は小学校の5年生まで東京におりまして、6年生の1月に父島の小学校に入ったんです。編入ですね。そこで1学期だけ終えて、私ひとりで、富山（新湊市、現射水市）にある母の実家に預けられて暮らしました。富山には女学校の入試を受けるために、行きました。

筆者 ちょうどその頃、太平洋戦争が始まりましたね。

敦子 そうです。私は無事、女学校に入学しまして、女学校（1年）の2学期か3学期の頃に、母と兄弟が疎開で小笠原から新湊市に引き揚げてきたと思います。父は家族と別れ、今度はひとりで戦地に行きました。

戦犯にならず、帰還



- 筆者 昭和20年の独立歩兵第13団旅団長で軍歴を終わられたと、記録が残っていますが。
- 敦子 最後は聯隊を3つ持って旅団長になったということは聞いています。父の軍隊当時のことを知っている人に聞いて、「戦犯にでも引っかかるのかしら」なんて思っていましたけど、それもなく、一人で帰ってきました。恥ずかしい、汚ない恰好をして、父が日本に帰ってきたのは、終戦から10か月くらいしてからです。心配していましたので、ほっとしました。とても嬉しかったですね。
- 筆者 帰還後、どんな仕事をされたのでしょうか。
- 敦子 無職ですよ。だって、仕事なんてありはしませんよ。だから、母がとても苦勞しました。母は早く亡くなりましたからね、苦勞したんだと思います。やっと、恩給出たのは、私が2番目の子供を産んだ時、昭和28年頃じゃないでしょうか。母は戦地にいる父のことも心配だったとは思いますが、それよりも、終戦で、金策の苦勞が母にのしかかってきた訳ですよ。父の軍隊の給料が入らなくなりましたから。女学校に行っているのが私一人で、弟たちはまだ中学1年生くらいでした。下はまだ小学校も入っていないような姉妹たちがいましたからね。
- 私の長女が生まれた時は国から恩給もなく、富山じゃ子供を産むと、実家から乳母車なんて、全部送るんです。私は買ってもらえることもなくてね、長女をずっと背中におんぶしていたことが思い出されます。
- 筆者 恩給制度は昭和21年に連合国最高司令官の指令で廃止になりましたからね。恩給が復活するまでのブランクの時期、ご実家は暮らしが困窮されていたんですね。
- 敦子 大変でした。母は色々持っていた着物や鎧甲の簪を売ったり、生活のために生命保険の外交をやっていました。友達が高岡にいたので、そちらの方まで行って、一生懸命、保険の勧誘をしていたのを覚えています。
- その頃、父は無職のまま、母が働いている間は、家にいて、夕飯の支度とかしていました。
- 父は新潟の寺の次男なんです。寺では長男は京都の住職になるべく、京都の大学に行きます。だけど、次男以下は中学しか行かしてもらえなかったようです。
- でも、自分もどこかで学びたかったんでしょう。それで、陸軍の士官学校に入ったってことを、後で本人から聞きました。私は父の生年月日も、士官学校に入った年も覚えていません。
- 筆者 では、士官学校から陸軍に入られたということですね。恤兵部時代は中佐でしたが、父島要塞司令官などの働きが上から評価され、父島で大佐になりましたね。
- 敦子 父と母は父が富山の聯隊にいる時に結婚したらしいんです。母は富山出身だから、そこで知り合ったんですね。母は新潟の父の実家に帰るのが嫌で、父島から引き揚げて



きてから、そのまま子供たちと共に、ずっと富山にいました。実家に息子家族のわびしい恰好を見せるのが嫌だったんでしょう。

#### 終戦時の思い出

敦子 終戦の年、私は女学校の3年生でした。もう勉強もしないで、工場の方に行っていました。はじめは富山の不二越という軍需工場の寮に入っていました。そのあと、高岡に戻って、昔、製織会社だったところで風船爆弾の紙を作る作業をしていました。3交代だったんで、遠くから来ている人は寮に泊まっていたんです。私たちは高岡市に住んでいたんで、何人かでグループを作って父兄が一人付いて通っていたんです。交代で仕事をしていたので、夜中に出てきたりして大変でした。

ですから、あんなに働いたのに、間に合わなかったのかしらと、玉音放送を聞いた時は、本当に悲しく思いました。

父は満79歳くらいで亡くなりました。あの年の人はよく飲むから。そして、老人でしょ、段々と体力が落ちてきまして。亡くなった正確な年は覚えていません。父の写真も結婚をするときにみんな処分してしまって、今は手元にありません。

父は謡をずっとやっていました。妹たちには、戦後苦しい中でも、お琴とか習わせていました。

(筆者から) 恤兵部在籍当時の父の話を伺って、今、初めて聞くことばかりでした。もっと、生前、大事にしてあげていればよかったと思いました。

#### 5-2 取材を終えて

小芝敦子氏にとって、恤兵部時代の川上の活躍は、まるで別人のような父親の姿であったという。肉親のことを述べる際の羞恥心もあったのだろうが、「もっと、大事にしてあげていればよかった」という言葉の底には、戦後、無職となった父を支え、一家の経済を一手に担った母親への憐憫や同情もあったのだらうと思う。また、敦子氏や家族が「父は戦犯になるのではないだろうか」と恐れていたとの述懐も重い言葉だろう。

川上が恤兵部時代、慰問袋などの改善策を提出した際、受理した陸軍次官阿南惟幾は国体護持、戦争継続を主張した<sup>43)</sup>ものの、1945(昭和20)年8月15日、剖腹自殺をしている。同じく、阿南の上官、陸軍大臣板垣征四郎は極東国際軍事裁判で死刑の判決が出て、1948(昭和23)年処刑されている。流言飛語が飛び交い、報道も虚実乱れる中、敗戦を迎えた川上の家族は、もしや、一家の柱である川上護も戦犯の判決を受けるのではないかと恐れていたとしても不思議な話ではないだろう。

---

43) 阿南の剖腹に至る明確な理由は遺書などがいないため、諸説ある。

『南支のあゆみ』本文中で「元歩兵第137聯隊第3中隊長，終戦時は南支軍副官」の今永英文が述べたところによると，

「昭和21年5月，広東地区日本軍の復員完了当時約300名の（戦犯）容疑者が残され，のちに香港，海南島，仏印等の各地域から広東地区に集められた容疑者の総数は，約600名に達しましたが（略）137聯隊は勿論104師団関係者からは幸にして1名の戦犯者も出なかったことを付言します<sup>44)</sup>」

とあり，家族が心配した，「戦犯になったかもしれない」という噂は杞憂だったことが判明した。

### おわりに

陸軍恤兵部は1945（昭和20）年以降，戦況の激化により，前方慰恤は停止となり，国内の防衛部隊の慰恤に重点を置いたが，空襲が激しくなりこれも実行不可能となった。1945（昭和20）年5月24日，接収した麹町区九段にある白百合高等女学校校内において空襲を受け，大部分の書籍，現物を焼失し，業務遂行停止状態で終戦を迎える<sup>45)</sup>。

一方，終戦時，戦地に残っていた恤兵部員，また，彼らが率いた慰問団はどんな事態を迎えていたのだろうか。その問いを解明する資料は少ないものの，喜劇役者の藤山寛美（1929（昭和4）年～1990（平成2）年）が示唆に富んだ，貴重な証言を残している。

寛美は1945（昭和20）年4月頃に，恤兵部によって皇軍慰問隊に加わり，満州をまわった。16歳になりたての少年は懸命に芸を披露していたものの，8月，奉天で終戦の報を聞き，動転した。まずは今後の身の振り方を相談しようと決断し，慰問団員たちと共に当時，新京にあった関東軍恤兵部に向かう。

「ところが，あちらさんは自分たちのことでいっぱい，慰問隊のことなんか，かわってくれるはずもない。そんなら慰問隊の本部のあるハルビンへいこうか，となりました。とりあえず，その夜は恤兵部が世話をしてくれた宿舎に泊まりましたけど，それから何日もぼくたちは新京に釘付けになったんです。そりゃそうや，終戦でなんもかもが一ぺんに狂うてしまったわけや。（略）そのうちにソ連軍の進駐が始まった。ところがみんな囚人部隊です。それはひどかったですよ。（略）婦女暴行も平気でしたなあ。（略）」

44) 「南支のあゆみ」（1967）「終戦後の広東地区に於ける戦犯裁判の実情」202，205頁。

45) 防衛研究所「陸軍恤兵部について 援護局」。

その後、女優さんに暴行しようとしたんですが、病気でウンウンうなって重病人の真似したりしたもんやから、みんな、あきらめてかえりました」<sup>46)</sup>

国家総動員の名のもと、国民に献金、慰問を強いた恤兵部の終焉は、「戦地と銃後を結ぶ絆」とは名目ばかりの、無責任極まりないものであったといえよう。恤兵部は自らが手配し、引率した慰問団さえも、あろうことか見捨てて逃げたのである。

当初、恤兵部は兵士への献金品を受け取る臨時の部署として出発したため、部員数も少なかったが、戦争の推移によって、重要性が増し、組織も肥大化していく。だが、恤兵熱は燃えたり、くすぶったりして変動的である。そこへ投入されたのが、戦地で戦闘を経験した恤兵部員川上護である。彼の発想力と実行力により、慰問隊の人選や慰問袋の内容が充実したことは事実であろう。だが、それは、著名な文化人、芸能人、そして、銃後の女性を多数動員し、結果、兵士にはひと時の慰安と快楽を与え、戦意高揚を促そうと意図したものに他ならなかった。

皆で出征兵士に、慰問団に旗を振り、そして日本は敗戦を迎えた。

突出した能力を評価され、恤兵指導者となった川上護大佐自身もまた、家族を巻き込み、経済的にも困窮した苦い戦後を味わわなければならなかった。

恤兵部の研究はまだ端緒に就いたばかりであるが、近現代史、ジェンダー史、メディア史、軍事史……どの分野、角度から分析しても、謎が多く、故に興味が果てしなく広がる。今後も、散逸する資料と関係者への証言採取、オーラルヒストリーを重要視し、研究を進めていく気持ちである。

時間の経過の中で、記憶が薄れ、答えにくい問いばかりのヒアリングであったが、快く応じてくださった小芝敦子さんにこの場を借りて、心より謝辞を述べたい。

#### 参考文献

- 押田信子 (2012) 「長谷川時雨と慰問雑誌『陣中倶楽部』 輝ク部隊慰問文集を中心に」『国際文化研究紀要第18号 横浜市立大学大学院国際総合科学研究科』
- 押田信子 (2016) 『兵士のアイドル—幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争』 旬報社
- 押田信子 (2019) 『抹殺された日本軍恤兵部の正体—この組織は何をし、なぜ忘れ去られたか?』 扶桑社新書
- 押田信子・小針侑起・広中一成 (2022) 『戦争と芸能 そのとき、どんなことが起きていたのか?』 扶桑社

(ジェンダー研究会)

---

46) 藤山寛美 (2000) 「関東軍の崩壊とソ連軍の進駐」『この国で戦争があった』 PHP 研究所, 249-250頁。

付表 陸軍恤兵部・川上護関連年譜 1939（昭和14）～1941（昭和16）年

		慰問を中心にした恤兵部の動き	恤兵部員川上護の動向
1939年	6～7月ごろ		恤兵部に配属（『南支のあゆみ』1967年10月22日 鳳会発行）で川上は、「陸軍恤兵時代の憶出」というタイトルのエッセイを書き、（4月24日の徐州での負傷から） <u>恤兵部配属を約10か月余の療養期間を経て陸軍恤兵部勤務を命ぜらる</u> とある。しかし、7月25日からの横綱・双葉山の慰問を手配していることから、恤兵部に入ったのはもっと早いことが予想される
	7月25日	横綱・双葉山一行が北京、天津、済南などを慰問	
	10月22日		恤兵部業務連絡及び運輸、配給、その他に関する打ち合わせのため、北支、中支の関係部隊視察のため、出張。11月26日に帰国
	10月25日		10月25日発行の『支那事変恤兵美談雄集 第一輯』（陸軍画報社／編 陸軍恤兵部／発行）の奥付に指導 陸軍歩兵中佐 川上護の名がある
	11月～1940年1月	モダンダンサー、石井漢一門が北支、南支に戦地慰問	
	11月20日	皇后陛下は日本赤十字社篤志看護婦人会創立50周年記念式典に臨席。同婦人会の恤兵作業などを視察	
	11月27日		東京商工団体銃後援連盟主催の座談会「帰還兵と関係者と語る会」に出席。兵隊は慰問袋に肉筆の手紙が入っていることを大変喜ぶことを知る
	12月8日		慰問袋献納式に参列
	12月15日		師団管下銃後援護事業関係者会にて、事変勃発以来の献金品の状況および恤兵事業について講演
	12月19日		JOAKにて恤兵部の献金趣旨をアナウンサーの赤沼女史と会話する
	12月30日	日活のスター、月形龍之介、清水照子、深水藤子、大倉千代子、松岡信江、比良多恵子らが、青島、天津、北京を皇軍慰問	
		この頃から、皇紀二千六百年を記念した恤兵部後援の慰問品展覧会などが、大手デパート各店で開催される	

1940年	5月12日	『輝ク部隊』の井上鶴子一行陸軍班は、陸軍病院の戦将兵に華道実演及び指導のため、北満、北支、中支に出発。帰国は6月中旬の予定	
	5月12日	華道家・勅使川原蒼風は門下3名と「華道報国満支」行きを決行。上海、蘇州、南京、青島、済南、天津、北京、大連、奉天、新京、ハルビンを基地として、前線部隊や陸海軍病院の皇軍勇士をいけ花で慰問。6月18日帰国	
	5月14日		第20回恤兵会議を開催。恤兵監藤村大佐、川上中佐などが参加
	5月16日		満洲に出張。6月6日帰京予定
	5月25日	皇軍将兵演芸慰問のため、廣瀬和夫一行8名は満洲に出発。60日間の予定	
	7月21日	皇軍将兵演芸慰問のため、花柳京之輔一行は中支に出発	
	7月28日	皇軍将兵演芸慰問のため、田中巖一行は満洲に出発	
	9月16日	演芸慰問団、貝谷一行ら10名（舞踊、ギター、その他）、50日の予定で南支に出発	
	9月16日	演芸慰問団、花柳二葉ら9名、60日の予定で中支に出発	
	9月	皇紀2600年記念慰問団を大陸各地に派遣（9月下旬から11月上旬） 大相撲力士も全員で南支で慰問相撲	
	9月30日	皇軍演芸慰問団、日活多摩川撮影所俳優、津守永章、松本秀太郎、近松里子ら8名、中支に出発。帰国は11月下旬	
	10月2日	特別演芸慰問団、北支第1班妻城良夫ら7名、北支第2班筑波波高一行（歌謡曲、浪曲、アコーディオン、漫才）ら7名、50日間の予定で慰問に出発 皇軍演芸慰問団、柳家権太楼ほか7名が満洲方面に。11月30日帰国予定	
	10月4日	皇軍慰問団、河合澄子ら8名（舞踊、漫才、浪曲）、中支に出発。昭和16年1月初旬帰国予定	
	10月10日	皇軍慰問団、末谷久雄ら8名（漫才、浪花節、舞踊、タップ、歌）、佐賀善一ら8名（寸劇、漫談、歌謡曲）、中支に出発。11月下旬帰国予定	

	10月15日	皇軍慰問団、梅島昇ら14名（演劇）、田邊藤江（芸名＝朱里みさを）ら8名（松竹演劇部舞踊、浪曲、三味線、唄、漫才）、南支に出発。12月中旬帰国予定	
	10月31日	皇軍慰問団、根岸常寛ほか8名（寸劇、漫才）、西川米行（芸名＝櫻川糸孝）ら8名（二人羽織、かつぼれ、芝居囃子、日本舞踊、アコーディオン、歌謡曲）、大橋浦吉（芸名＝木村友龍）ら6名（浪曲、三味線、漫才）、北支に出発。12月下旬帰国予定	
	11月8日	皇軍慰問団、松平操（芸名＝松平ラスカ）ら9名（民謡、漫才、浪曲）、北支に出発。12月下旬帰国予定	
1941年	1月13日	皇軍慰問団、市川升紅ら13名（演劇、義太夫）、中支に出発。3月7日または8日南京発	
	1月25日		父島要塞司令官（中佐）になる

※川上護の恤兵部在籍当時を中心に作成。

（参考資料）胎中千鶴（2016）目白大学人文学研究第12号「戦場と相撲―日中戦争期の大相撲と兵士―」，時津風定次（2008）「横綱の品格 双葉山」（ベースボール・マガジン社），大日本雄辯會講談社（1940～1941）『陣中倶楽部』第50号，『陣中倶楽部』第51号，『陣中倶楽部』第56号，『陣中倶楽部』第60号，『陣中倶楽部』第71号，小林善帆（発行年不明）立命館言語文化研究第26巻4号『『女性満洲と戦時下のいけ花』』，水の江瀧子（1984）『笑った 泣いた―ターキー放談』文園社，東京商工団体統後援後援聯盟（1940）『商工統後』第2巻第1号，アジア歴史資料センター